



文
部
省
の
蔵
書
三
編

神
皇
正統記
神皇正統記
神皇正統記

^ 13
2905
3



四書

13
2905
3

源流の夜寐三編叙

人一日一夜を寝るも一億三千の想ひ

所謂心視經の源流も此の如し

おもしろい人間のお呼吸の教一万二千五

百息あるまばその呼吸の思ひせ

加へると億千の教も元は呼吸の途方も

多かりしをから佛の説くところの心の方度と

七和九

言得て地獄変相の画虚言をうろくし以て
いふやとんその大智徳の釋迦佛もたぬの地
の元史して悉陀をふとんうろくしをさるる
米中御座るにまはれりての難行苦行は道と見
とる緯をかたけりまを佛説とせしは佛説と今
極を有するまはれりて波曇の末と傳ひ其方の南
如乱体ものし智識よりし牛馬頭を責ふ

り今不知孫をもとるうろくし大晦日未後新
やは可き者やとん寒うんとしとん人し書解が
注又僥倖ふ事は何れとん紙の草紙と總
はも口を辨さるるの一場と書あが

笑止

平時座中の初の笑止

拙著事ありありとて誌



大女屋
花の宴
歡樂

左文
門

於
橋

於
麻耶

蘇子言の藤五



於好
物乃
花通山

於好

蓮於

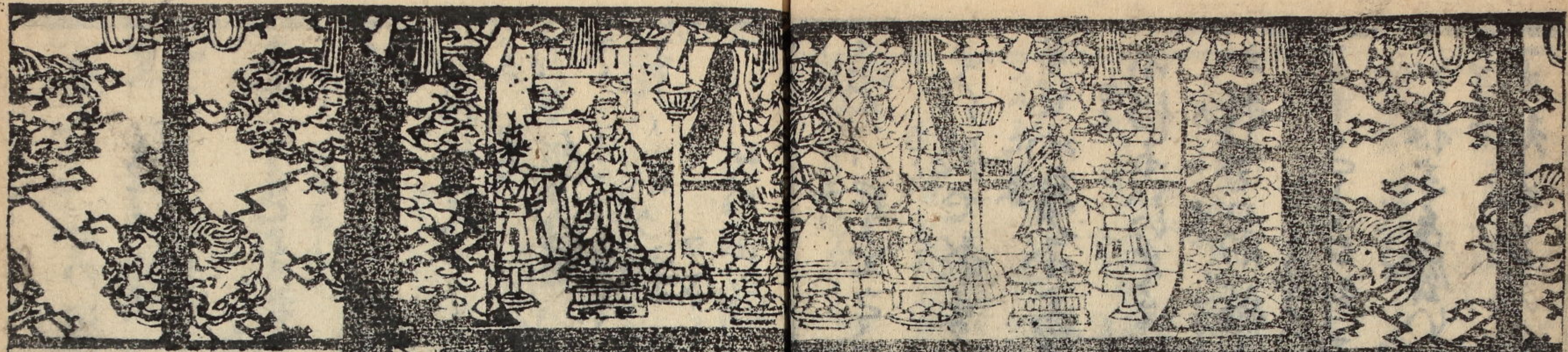
一
齋
女
乃
齋
五
六

きんろうの健の思ひ差ひをあつて、傳人ある馬遣不商
後未あぐる遣ハ固よりんようくぬ性あて。この工を喫と
等一とを寄め強さんへせむ。お情が邪ん不初獲
きて、種くある愚計を勅むるや、不初の隙より不初を伏
ぐぐわくあり。飽まむとまむと仕裸せむ。心暗トとあひん
より固抱の系ゆらちまむと。さか耶麻を悟きて。服
穿し孩児を水不あさんと。その較計の他いあ、る
遣いとまよりあて。何とまく容子を探る不え、る場

町不ありけるが、今ハ名紙不引移り、西初習舎の修
驗者あり。名を寂實院食曼といふ。彼が祈をまあ
時ハ龍瓶様あどの魅入ま、いん不及をん死具生具
いんあつらの中強ありとて。ををより為私あつて、
て密不悟ハ彼を移まむとま修法のあつてむあいと大志
まん。名紙の寂實院へ移りまむと。いんま、正面より不勤
明王古在ハ移遮屋刹多遊の二童子と安を並あ、若
あ、種々の供あを持、け、る、輝く、後、摩、壇の、併、何

さぬ發もあり。氣あてり。と。さう。と。日。さ。え。や。る。遣。は。せ。処。
小。流。と。て。宴。時。拜。と。あ。り。け。る。祈。へ。生。の。食。買。出。ま。り。
「こ。ま。い。ら。う。也。系。消。承。じ。ま。ら。本。町。色。さ。ら。お。出。ま。さ。さ。と。こ
と。中。ま。と。サ。テ。を。方。で。さ。ら。ま。ん。た。ら。の。び。い。を。借。ひ。う。
日。く。冷。が。暮。ら。う。ん。ト。い。ま。ま。て。る。遣。一。被。あ。彼。食。買
の。教。を。又。つ。小。背。の。熱。發。あ。り。と。鼻。を。さ。く。さ。き。思。く。し。て
顔。青。張。り。眼。中。尖。く。逞。す。き。ハ。か。の。煙。と。不。安。を。お
を。不。動。を。不。由。に。倍。て。怖。し。と。ま。り。人。を。る。と。目。く。あ。り。て

一作のあり。又かきさし。日暮まで。サテ。本町。う
遠くと。見ま。糸。と。う。ま。い。他。の。み。て。ゆ。さ。ら。ま
せぬ。が。夕。ト。因。り。で。也。祈。禱。を。成。ひ。さ。と。中。ま。叙。ま。り。し
ま。が。う。只。今。ま。さ。不。と。ま。う。以。後。を。ゆ。さ。ら。う。ま。を。ん。ま。る。今。日
か。知。己。不。成。て。あ。け。は。ま。で。う。于。時。こ。ま。い。祈。あ。ら。う。お
尋。ね。ま。う。う。う。う。強。を。ら。う。也。交。納。を。さ。さ。て。下。さ。ら。ま。う。ト
水。引。り。け。し。果。然。と。物。合。買。い。と。さ。ら。ま。り。て。世。に。示。し。と。う。あ
笑。ひ。し。と。さ。ら。う。く。四。竹。亭。か。四。不。死。の。痛。を。入。ま。う。ん。下。ら。程



あまのついで

馬達
名前の寂實院
あまのついで
たのむ



あまのついで



私わたくしがさくく文ぶんををささううととまませせううトトののみみああらら。腰こし
のの墨すみ斗とををぬぬきき出いしし。傍そばををむむききてて寺てらかからら會かい曼まん文ぶん由ゆ
ままとと文ぶんああららじじとと。契あき小こととああらら入いりりとと一いつ通つうのの為ため智ちのの能のう文ぶん
ああららめめてて持もち出いるるををううけけ方かた由ゆ出い来き。供くわんととのの名な前まへのの肩かた
ぬぬ不ふ。雪ゆきのの下した米まい所ところ大だい多た。庭にわ内うちをを造つくららてて中ちゆう形けいありあり。互たがひ
不ふ披ひくく証しやう文ぶん會かい曼まんととままをを續つづ下くだししふふ。生なま年ねん十じゆう七しち。某たがひのの女むすめ子こ
胎た孕ら。舟ふね子こ一いつ命いのち全ぜんううとといいくくととのの由ゆ。忽たちまち地ぢ病びやう身み不ふああるるのの
修しゆ法ぽう。信しん度たうをを傍そばへへ移うつここ入いれれむむ。供くわん物ぶつととのの外ほかのの料りやうとといいてて。

金かね二に百ひやく兩りやう小こ相あひ定さだめめ。今いま日にち金かね子こ百ひやく兩りやうああををむむ。後ご日にちのの残ざん金かね
透と丸まるああららじじととすすうう。そのその内うちをを造つくららてて會かい曼まんがが証しやう文ぶん
ををささううととまませせううトトののみみああらら。供くわん物ぶつととのの外ほかのの料りやうとといいてて。小こ相あひ定さだめめ。契あき小こととああらら入いりりとと一いつ通つうのの為ため智ちのの能のう文ぶん
ああららめめてて持もち出いるるををううけけ方かた由ゆ出い来き。供くわんととのの名な前まへのの肩かた
ぬぬ不ふ。雪ゆきのの下した米まい所ところ大だい多た。庭にわ内うちをを造つくららてて中ちゆう形けいありあり。互たがひ
不ふ披ひくく証しやう文ぶん會かい曼まんととままをを續つづ下くだししふふ。生なま年ねん十じゆう七しち。某たがひのの女むすめ子こ
胎た孕ら。舟ふね子こ一いつ命いのち全ぜんううとといいくくととのの由ゆ。忽たちまち地ぢ病びやう身み不ふああるるのの
修しゆ法ぽう。信しん度たうをを傍そばへへ移うつここ入いれれむむ。供くわん物ぶつととのの外ほかのの料りやうとといいてて。

外の料二十兩と。あつふよらうと。早はや煎せん色しきのの。藤ふじ忽たちまちををんん子こ
悔くわいるるををりり。會かい曼まん文ぶん示しららちち笑わらひひ。一いつとといいひひ。金かね子こ二に百ひやく兩りやう。
一いつとといいひひ。是こゝああららじじとといいひひ。愚ぐ情じやうがが文ぶん書かけけ。一いつとといいひひ。中ちゆうままののかか不ふ過とままんん。
一いつとといいひひ。おお徳とくめめ。應おうずずららししててトト口くちののいいごごんんああらら。先まづはは徳とく寄よ寄よ
のの事ことををりりてて。後ごでで半はんああららじじとといいひひ。百ひやく兩りやう。ややままくくとといいひひ。

吉のりい産かゝるまで陶後の方へ還前ふでも性
る。右根あはむいふとの。女婿いあしと教舎ひうく
よく物おりのおろり女が執治で「アウ子孫えんし
おけて鳥者ごんの肉者えんがあうまうとトおけて耶麻
い痛立つおひ。お小由あうで莞示と「ラヤ左根うく
来とる。子孫えんし例のあう。まうくは方へお出と云
ぬ。そのお後多鳥者。小由一折ふ来ふと早く付て
左根云ナ「ハハト返ゆるる日あく。子孫えんし

子へ
かうとさんおま「うり天造ざらう。まどろ破して
おは在まきして。子孫えんし。何根うま
と五日十日中。お産あううあいらがあるのナ「お三岐と
よりうて物ととやうと子。今何処うう来さう。モウ
あくかとやうと。とまがアお耶麻さぬのおる舎い
道クエ「アモウを処と。彼女の子が出て居る所サ
「ラヤまとあ小由奇藤ふお庭か「ナニとアア明とあり
のか中庭ごうと。お産あうアあはいまアおる舎ふごの

小折茶持とりののびうら。見うらはるのてきく用
かまうらりの小十三。さき由目所さぬが出れ在あうら。
此方小折と替古をしく位い。自とが香ひで居るうら
と。とらぬアおお根お年の功をひらうらうて入つあや。何
ゆおお根をんあうと。山昔芳小杜をうまぬあ。アお茶
か出来このうエ。その通へて急ぎあうして。おお果おのびら
あせん。さ代り小お茶菓子の甘美のがどいままあうら。
些お出。杜をうまう。おのびらおのびらの子。昨日

中を移くろくが。些ぐ物靡ごうら。昨日食小まのて
あまのて。今うあうの。有あうと。林羊羹あうの。ア。おどま
あふまう。トひひりま。処答をうらうてんや。ア。モウ鳥音由
降りさうあうの。史と由ゆのて子。余小居る。コレおさえぬ
ア。とあぬ。トあぬ。終るぬ小。鳥音いと。ををて。運入
鳥。ア。お勝さん。さき。山迷惑であうませう。ア。然
ア。と。由。同縁と。ア。らめて。お。吳あせエ。ア。う。あ。く。あ。お
え。吳あまの。ア。ト。ま。う。ア。か。妻。あ。ら。う。向。ひ。ア。う。く。あ。く。准

おん尻あかア及びません。か耶麻さぬてのぞく瘰癧ての
目於さぬあゝさあ四実子。あて何とあひませの。史を
た格やさきませう。まうしと祈が目於さぬが。裏面
後いあひません。とまゝに紙若方とりあひの。さう構ひ
とごうません。ト依結あひて出てゆく

嵯峨迺假寐卷之七終

耶麻 嵯峨迺假寐卷之八

東都

松亭金水編次

第十五回

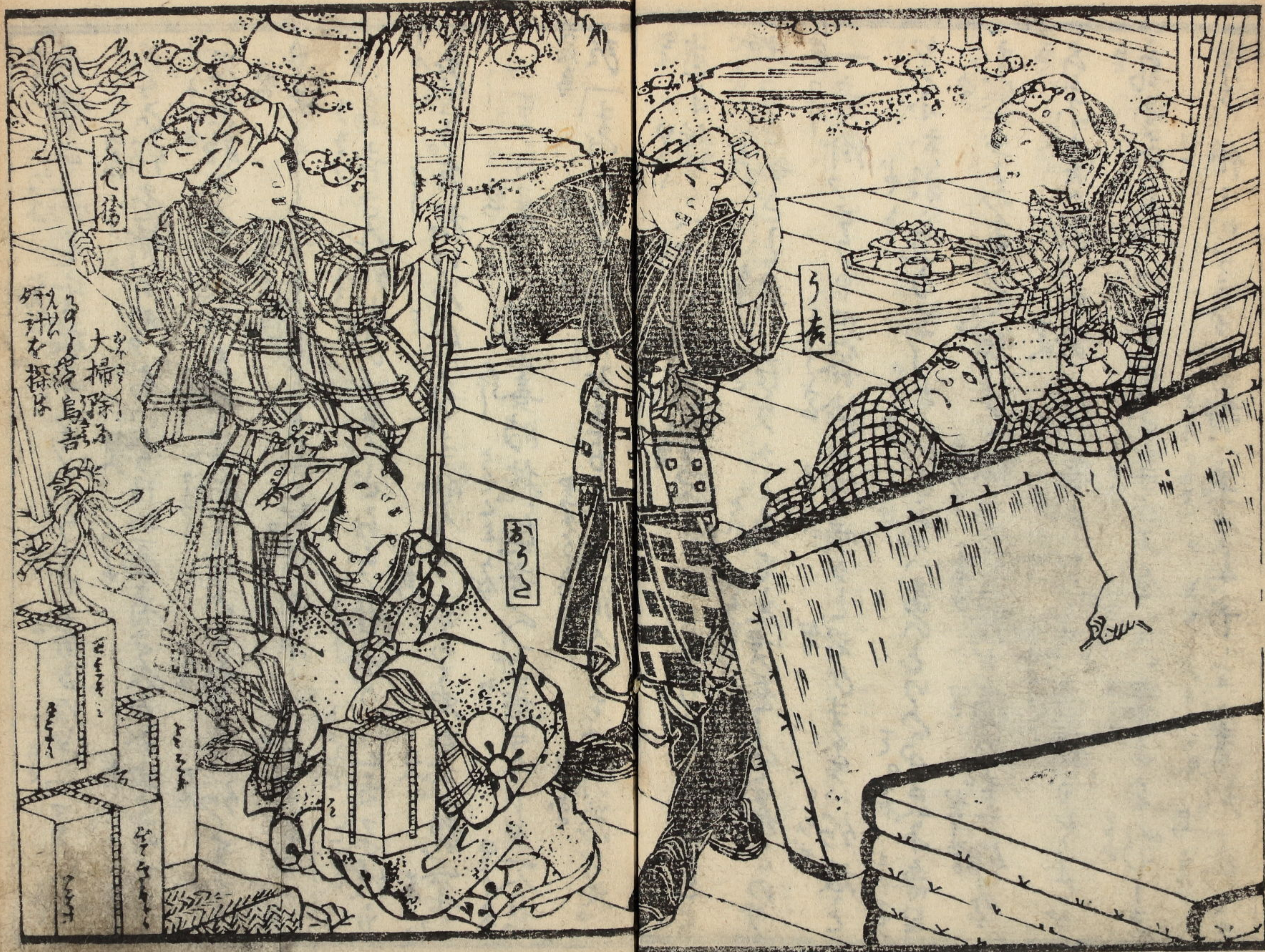
かくてその月の果敢あく書で。お降月の初旬とあまざいお
耶麻の感冒の心地とて。二日二日の寐うり記さう。然まてのり
あひあつた。とあひさうーが。五日とて。右ふ左ふ骨が痛
むとのあまざい。まがごとの熱の月攻し發せぬあひあひぬべし。
平生とら遠の胎孕のこと。大事のうらふゆ大あまざい

て。お優ゆう多たいい夜よのね痛いたむとあり。身み動うごきまさんをつり。
いいままけけきき冬ふゆのなか風かぜがふ夜よのねにまささ
身み不あ潔けつをうあらはら大おほ煙えんのひ火かを死して介抱うか
ハ等おな宗そうありむ。醫い師しのち教しよ年ねん子し家かへ出入いる半井い順じゆん伯はく
いい年ねん齡れいのい五ご十じゆ有ゆう餘よのひ人ひと名なよく。療りやう治ちのい珠しゆさら功こう者わ
のようを人ひと々々のいひりて難せばは難しうりそのい人ひとを救て
おお火か茶ちやをの用もちりまさどうてのい病びやう由ゆあり。然とて政せい痛つう
患わづらむ由あり。感冒くわんぼうとかり。バ感くわん冒ぼうあり。幸のいまま

別べつあり。丈を患のい由ゆ業ごうト苦し。用あり。おらいままて。食
車くるま茶ちやを勅めありどしのいままと程と難ぶまさ。乃及な其そののい候こう
のい物ものあり。初はつへんを患を患まえんと物ものまささどお耶麻あまのい兵へい衛ゑい
氣きを用て。を痛いたむとを好む。月光げつこう一いつ時ときのい足あし腰こしのい痛いた
こい不あ潔けつむ得まさね病氣びやうきおらう。半井い順じゆん伯はく侍しやく女によ
どい由ゆが案内あんおつき。まま地へ送入おくりいる。一ハ順伯じゆんはくさん毒
目めく。心苦こく勞らうをこごといまさ。何れがう。心苦こく勞らうをこごといまさ。新のい湯ゆ液えき
まま。病びやうのいやう不あ潔けつをこごといまさ。全体ぜんたい何なにをこごといま

もろまきませんが脚や腰や脊中や腕が痛むといふ余ア
何とらう。又強氣の類といふ事あるやうに「除人」は
指由たませうが。左指の人は遠くませう。勿論風
毒痛風ある。渾身の痛むもさうまじく全くさ指
赤茶ぐらさうりません。一実小者感赤病氣さ子「志
うあがら私に強つて左指中にも。まこととまじく診ま
あろ。その病氣の中もたませう。何あうまじくお出入の
疎房どの小せゆを診せあさうりま。」「左指サさるせゆ

仕てんませうの事いふ事をいふ耶麻の記の「私」の快
さいます。翌うう記ますヨ。ままか茶を強まそのあろ。
俗率順伯さんのお茶を頂きさうりま。外の入小
掛たままの疎小否でさうりま。順「お茶とお
けあのさうりません。実小者様の中容体が私あ
かりません。」「且ねへ今のやうふ中このせさうりま。下
左指あ人あう。誰か診せて申ド。あう。あう。あう。
順伯さんのお茶を飲。補あめて居るが。ま。自己



大掃除
あうこ
あうこ

あうこ

うき

あうこ

ア、順伯といふ人の、殊小下よごと、命がのり、史を思ふ
始め、か耶麻、え申、伝作し、て、在、ごう、う、あ、う、園、の、さ、め、の
さ、ト、あ、へ、通、ま、い、記、さ、る、か、耶、麻、を、止、め、て、ア、サ、ま、ア、
招、し、て、か、在、ヨ、他、人、が、ま、い、の、根、申、殊、小、り、の、あ、い、子、先、刻、目
物、の、か、ま、あ、さ、る、あ、い、か、耶、麻、申、え、ん、く、快、方、ご、う、毛、角、塞
い、で、ま、う、り、存、存、の、い、れ、小、引、ま、が、あ、い、ご、う、丁、交、明、後、月、
成、の、日、ご、う、一、年、を、さ、し、て、あ、の、後、ひ、小、思、入、き、旅、や、小、仕
や、う、と、あ、い、の、い、史、小、能、て、陶、徒、一、共、爺、え、を、い、小、あ、が、や、う

と、あ、い、の、い、け、し、と、ま、ま、い、お、且、か、ま、さ、ら、う、う、と、を、ご、ご、う、う、
他、の、あ、い、の、ま、ま、い、ま、ま、さ、ら、う、う、ま、あ、う、う、ま、ま、い、ま、ま、い、が、此、ま、い、
小、能、と、や、う、の、取、ま、で、月、を、申、早、い、あ、り、ま、ま、い、ま、ま、い、鳥、吉
と、申、是、の、ま、ま、い、い、い、け、し、と、ま、ま、い、此、方、へ、ま、ま、い、て、居、て、老
翁、の、代、り、ま、ま、い、ま、ま、い、と、申、か、い、の、か、い、ま、ま、い、と、ま、ま、い、
い、左、根、の、い、史、あ、い、二、日、を、う、鳥、吉、を、ま、ま、い、我、う、い、お、使、
や、ま、う、け、し、と、い、あ、い、て、申、か、耶、麻、が、あ、ま、い、が、申、却、て、凶、
芳、小、あ、ま、い、ら、う、う、う、う、の、その、あ、い、か、使、入、ま、ま、い、あ、い、て、ま、

かまらば疾由篤と明きあはぬ不ぞの男どもを伴ひ来て。
さて相股を合はせまじまづとの間うらその冷くお耶麻さ
まのか森るをバ一敷亦不まらふやと障子隔紙かぞけて
あまのあびて探太まつり。掃除のさめくあめく入。お耶麻
が寝所へ来るはいさや己の刻の比及あまを。華務ハ甲
聖文ぐあく。お耶麻をまあまのが望まきへかり。居るの正
むて相交のまつく。まあまをさく。小持出せ。サアあまを掃
やうとせままらる鳥古が働き。を伴ひ男の男のどと
まま情出で併ひ出せ。鳥古いを処等を賦く月一
アよく掃除ハ達いさ。あまの昔併う且ねの居る。一志
奔飛させあめアあまぬ。連のめと小探太板を。引利
まて極の下の。伽の葉まを獲ひ度。出苦芳あまら。園祥
放し。下のひの終ら。ん秋枝を。何処うう。持て来て。あり
めりく。と引放せ。中。小。板の刻る。の。あり。を。伴ひ。男。ハ
男どもを。世間へ掃除。不。能。ま。ま。と。と。の。あ。ま。と。ど。も。根
太板まを。刺。ま。と。の。ひ。ら。の。ま。格。め。て。伴。ひ。ま。ん。形。と。

ち。か。て。大。か。る。か。る。最。大。依。小。と。い。ど。の。構。り。を。根。太。を
務。ら。ん。引。放。し。常。と。い。ま。て。隔。ら。ぬ。極。乾。し。る。所。を。あ
と。又。と。と。怪。し。ま。と。の。あ。鳥。吉。い。ま。の。天。井。を。作。さ。し。え
て。一。つ。の。天。井。五。張。小。張。て。あ。け。き。と。の。台。長。の。風。の
盡。ま。て。塵。埃。の。え。と。あ。ら。う。形。し。て。月。の。入。り。え。ん。と。の。
ろ。く。と。ま。の。丸。不。か。る。サ。ア。見。ろ。う。天。井。板。を。引。割。し。て
一。掃。除。し。て。吹。て。ま。す。く。不。安。さ。る。所。の。か。後。多。も。遠。不
吹。つ。け。て。一。根。太。と。遠。ら。て。天。井。へ。紙。を。つ。け。て。一。紙。を。ま。か。
モ。ウ。く。と。ま。て。窓。ら。う。下。吹。て。鳥。吉。の。取。換。を。あ。り。一。イ。ヤ。く。こ。ま
い。自。己。が。備。と。と。板。の。五。枚。七。枚。換。と。と。ら。て。毎。日。と。ま
用。不。遠。入。る。丈。十。人。合。時。で。来。て。換。ら。せ。る。也。ア。説。方。ま。を
あ。の。中。来。あ。る。何。の。構。り。が。あ。る。の。う。と。あ。る。の。由。を。説。き。し。て。換。ら。う。
板。引。放。其。按。不。差。し。る。也。う。得。奇。藤。の。家。造。り。の。通
り。安。き。座。敷。一。丈。五。寸。の。ゆ。ら。り。の。通。り。と。一。枚。と。お
拂。ひ。の。ま。と。替。つ。こ。と。あ。け。き。と。の。程。を。い。う。あ。れ
と。を。あ。け。け。り。と。悔。め。ど。の。今。更。も。の。後。並。ま。せ。給。へ。切。

ち。か。て。大。か。る。か。る。最。大。依。小。と。い。ど。の。構。り。を。根。太。を
務。ら。ん。引。放。し。常。と。い。ま。て。隔。ら。ぬ。極。乾。し。る。所。を。あ
と。又。と。と。怪。し。ま。と。の。あ。鳥。吉。い。ま。の。天。井。を。作。さ。し。え
て。一。つ。の。天。井。五。張。小。張。て。あ。け。き。と。の。台。長。の。風。の
盡。ま。て。塵。埃。の。え。と。あ。ら。う。形。し。て。月。の。入。り。え。ん。と。の。
ろ。く。と。ま。の。丸。不。か。る。サ。ア。見。ろ。う。天。井。板。を。引。割。し。て
一。掃。除。し。て。吹。て。ま。す。く。不。安。さ。る。所。の。か。後。多。も。遠。不
吹。つ。け。て。一。根。太。と。遠。ら。て。天。井。へ。紙。を。つ。け。て。一。紙。を。ま。か。
モ。ウ。く。と。ま。て。窓。ら。う。下。吹。て。鳥。吉。の。取。換。を。あ。り。一。イ。ヤ。く。こ。ま
い。自。己。が。備。と。と。板。の。五。枚。七。枚。換。と。と。ら。て。毎。日。と。ま
用。不。遠。入。る。丈。十。人。合。時。で。来。て。換。ら。せ。る。也。ア。説。方。ま。を
あ。の。中。来。あ。る。何。の。構。り。が。あ。る。の。う。と。あ。る。の。由。を。説。き。し。て。換。ら。う。
板。引。放。其。按。不。差。し。る。也。う。得。奇。藤。の。家。造。り。の。通
り。安。き。座。敷。一。丈。五。寸。の。ゆ。ら。り。の。通。り。と。一。枚。と。お
拂。ひ。の。ま。と。替。つ。こ。と。あ。け。き。と。の。程。を。い。う。あ。れ
と。を。あ。け。け。り。と。悔。め。ど。の。今。更。も。の。後。並。ま。せ。給。へ。切。

と昨日より。事をへ人ををせらせ。をまの準備を。料理の執事を招め。て。食自。身。小。政。へ。て。残。り。新。あ。く。子。付。る。を。ぞ。今。日。船。ま。ご。ら。う。料。理。を。庖。厨。様。と。申。さ。る。び。魚。菜。蔬。何。を。と。山。の。こ。小。把。う。て。切。り。割。り。の。洗。方。煮。方。の。手。續。き。順。由。と。も。な。ま。ま。さ。る。は。よ。う。い。途。々。集。ま。る。客。の。も。ろ。出。入。の。商。人。職。人。ま。で。一。通。り。あ。ら。う。と。一。人。由。席。に。招。く。ゆ。ぞ。こ。の。小。座。を。間。毎。く。小。務。合。さ。る。席。中。あ。く。想。辨。お。よ。そ。二。三。百。人。ま。た。こ。の。と。を。ま。つ。ひ。て。小。佛。の。小。あ。る。の。の。由。あ。り。ま。は。だ。秘。法。を。こ。の。二。入。ま。で。招。き。り。除。月。の。ま。の。あ。ら。う。毎。日。を。夜。交。替。小。法。切。べ。と。教。へ。と。ま。え。教。多。の。合。を。さ。ら。せ。け。ば。婆。婆。の。あ。り。く。教。び。て。その。し。を。承。知。あ。り。ま。は。今。日。の。續。常。形。を。く。執。り。あ。り。ま。は。耶。麻。の。か。く。ま。を。支。た。ら。う。教。び。の。修。行。を。申。入。を。申。願。せ。り。ま。は。志。願。向。が。あ。る。と。い。ひ。ま。の。見。ま。の。合。あ。り。け。り。ま。の。ま。の。ゆ。ゆ。と。あ。く。見。ま。塞。を。苦。不。多。と。て。備。妙。の。あ。ら。う。ば。積。り。て。ま。の。晴。あ。ん。と。こ。の。牙。を。か。り。

伝実の親とて由ある有難さ。心地の平生不憂う松
と快き振をして月々の。さう。然とを飲ぶおのりあり。と
進まぬ月不の登化。執りと清らう不ありけし。案に
ふさぐん丈あり。この振ひ不気由。居さし。と。お耶麻が
子舎不入来り。一。イヨ。お化。振らう。出者あう。今月、何
振と些の快く。ア。彼。強きを世出。て。口。家。モウ。今
酒を出。し。ころ。と。息。不。振。や。り。不。放。て。来。り。一。古。振。サ。大
子。振。や。不。あ。り。ま。し。こ。子。何。ぞ。晚。あ。や。ア。後。人。て。日。あ。る
の。て。と。い。ま。ん。う。一。古。振。サ。後。人。と。り。の。所。が。ア。強。き。も。必
後。と。い。え。ん。種。の。い。ど。り。せ。ね。く。と。又。切。ころ。お。め。人。を。二
十。人。を。り。守。護。の。也。花。水。橋。へ。云。て。来。り。と。が。始。末。と。お
今。年。位。秋。枝。の。来。り。と。来。り。後。と。と。一。更。で。種。く。さ。う。四
七。十。二。人。位。あ。り。倍。と。あ。げ。ま。ん。と。云。て。誠。と。と。大。う。こ
今。不。来。り。と。ころ。一。整。屋。町。へ。て。由。切。け。て。来。り。と。と。遠。か。大
勢。あ。ら。う。け。色。ど。花。水。と。い。後。が。遠。ら。う。と。却。て。迷。惑。を
る。と。ころ。ア。ア。く。と。と。と。彼。振。う。園。振。う。る。不。合。せ。と。化

子。振。や。不。あ。り。ま。し。こ。子。何。ぞ。晚。あ。や。ア。後。人。て。日。あ。る

の。て。と。い。ま。ん。う。一。古。振。サ。後。人。と。り。の。所。が。ア。強。き。も。必

後。と。い。え。ん。種。の。い。ど。り。せ。ね。く。と。又。切。ころ。お。め。人。を。二

十。人。を。り。守。護。の。也。花。水。橋。へ。云。て。来。り。と。が。始。末。と。お

今。年。位。秋。枝。の。来。り。と。来。り。後。と。と。一。更。で。種。く。さ。う。四

七。十。二。人。位。あ。り。倍。と。あ。げ。ま。ん。と。云。て。誠。と。と。大。う。こ

今。不。来。り。と。ころ。一。整。屋。町。へ。て。由。切。け。て。来。り。と。と。遠。か。大

勢。あ。ら。う。け。色。ど。花。水。と。い。後。が。遠。ら。う。と。却。て。迷。惑。を
る。と。ころ。ア。ア。く。と。と。と。彼。振。う。園。振。う。る。不。合。せ。と。化



徳川の
御膳の
人々
とて
賑わ
ふ

彼方は方を修くと歩ゆの契を安を祝ひて
ふるの席に祝乾編者の上客あまたの由を延不
て客を致結との儀中にお情由在て巻巻を酌つ砌への徒
客安めゆるとくとの法を擧ぐるて彈出にその更不
花水のか酌不愛さしものありお耶麻の果まてお後ま不
依能履りんとる不あつてとて何れおら面白らう不吉
併への想まア妙陰氣ごらう「まうとまうとお情を
修まらぬとまうまうと下「情とあまらふ子余へ情をさ酒
由十かとて故て間毎不膝部を出はと客ハ程とらあて
出入の職人あ人まて。と各各二の振付は松本料理ハ振
めくと。いそぬをうと不情と果まて。箸とらとる忘は
おらと。崩まう「極中あつらう。果まてと麻本とまうし
おの塵を探さぬと。妙て申らう以下の人ハ引物
の代りとして白本の木具不月縁包とあつらひ五百匹
と百匹二百匹を下とあて。鑑との茶不あつらひの
飲ひ果はあまらう。あふ不飲て陪とあまらひとす

長酒の癖ありの由切あひん。こゝ家町噂も終て遠
あひく不立降まら。さてまよふお肉の男女とまよおあ
考く料理の遠りて婢女小奴もまよまよを。終美をさ
せ壽ぎけまら。実不栄花の絶頂あて。嬰児のりま
果報ぞと美くこゝあねのあうけと

嵯峨迺假寐卷之八終

雪迺嵯峨迺假寐卷之九
耶麻

東都

松亭金水編次

第十七回

却説天多屋丈あつ。控くふるを獨くと。お耶麻が病
ひを治さんと。金銀の入りいと。たん尻不着帯の終ひとて。
かき見も三百金をろうと費し。いと控りくあけまら。その目
お耶麻の快くあて。まよまよの稍不全使の。あつとまよ
ひの外、目く不重とゆくまら。順伯の外不強金とて。終

ある医師をもちまひま。陸軍大臣の早急をいふ。その際
法をまよとどめ小その強し由見えん。昔勝か後まうら
りの中よりあり。鳥青のいふをまへへんて。且番按と日米工
の。信ふあせる神佛へ立致あて新のつけり。そまに神佛の
利益ふあけ。陳小人の信ふ憑ると。実あるうまこの年ゆ
書て新島の年とあかり。睦月の末旬ふあぶてい。その比
よりか耶麻が版こそい。張るふありのけまこと。そをい知て
快く。食するも大りと平生ふあまういふたふた。そあひのけめ。

鳥吉の下のそい。飛立たうふら。執大切ふ抱ふ
ま。以あうら名城ある寂實院いその以より。丹精を抽
を。細伏の法を信し。發をあうせとあうふ。大金をゆ
貪むんと肝膽を搦きけま。佛とてか耶麻の薄牙
疼む。水才ふ重き件ふありし。か先以て。造名城ふま
念置ふ。念置てこのあどの。空をふあて。積るをう。念置ハ歳
の書む。入用のゆま。あま。きむをいひ出。物密あうりハ
海とま。一件あひい。百あま。実得るをいひ。心む。

二十支の新精利。其後不十分あり。昔佛が愛おしい
錢金づくむの替らまぬ。其の毒あらず今二十兩發くと
しに多遣が。其の初よりうの物未あらず。既小昔佛の二百支
と。証文小まきで。其の初よりうの物未あらず。既小昔佛の二百支
ありて二十支の場金の些むらうの。其の初よりうの物未あらず。既小昔佛の二百支
まも右も左目と換換して。あつて。貸へる容を。其の初よりうの物未あらず。既小昔佛の二百支
寂實院の詮方あひききと。其の初よりうの物未あらず。既小昔佛の二百支
由意の掛小ある。其の初よりうの物未あらず。既小昔佛の二百支

よき方小強くあり。一俵かる大奉を。其の初よりうの物未あらず。既小昔佛の二百支
を。いんとも。其の初よりうの物未あらず。既小昔佛の二百支
現小鳥古者。其の初よりうの物未あらず。既小昔佛の二百支
所為ゆ。其の初よりうの物未あらず。既小昔佛の二百支
を。いんとも。其の初よりうの物未あらず。既小昔佛の二百支
白目く小性か。其の初よりうの物未あらず。既小昔佛の二百支
癒あん。其の初よりうの物未あらず。既小昔佛の二百支
小梅。其の初よりうの物未あらず。既小昔佛の二百支

とく来るもの。飯を忘る風情あり。その阿屋と亭
母小。花の山の気をも摸し。芋蒸姑の田楽店。夏橋
お市。純夏。菓子をあふく。その傍。皮剥うけ。九条
母を。お小。藤。ア。と。煮。え。せ。あり。或。ひ。の。葉。版。夏。腐。の
田楽。お。で。ん。福。酒。竹。林。麦。め。箱。天。鼓。屋。の。屋。巻。ま。
と。お。を。あ。く。小。解。ア。と。と。と。小。侍。女。仲。居。の。女。様。
ま。う。け。一。容。小。持。ひ。の。小。拭。う。ち。冠。ア。中。小。う。け。茶
屋。四。休。所。の。角。形。焼。を。出。し。う。ら。床。机。を。あ。く。今。う。う。

の。火。入。茶。釜。の。下。の。煙。も。良。あ。り。と。と。と。ま。あ。の。が。後。向。し
く。瑞。し。う。ん。と。と。と。競。ふ。お。小。於。て。お。橋。を。始。め。お
好。お。違。わ。り。の。由。さ。と。あ。り。と。と。と。く。と。う。ち。奥。と。て。已。が
の。進。う。新。へ。と。と。と。考。て。欣。合。は。お。耶。麻。ハ。と。ゆ。て。響
お。務。より。下。を。お。後。ま。茶。務。小。伴。あ。り。き。か。あ。く。と。と。と。
と。ま。あ。く。お。小。実。小。主。が。心。を。お。務。し。う。後。向。を。お。り。く
感。し。う。一。茶。務。さ。ん。誅。小。の。気。色。と。お。工。を。お。務。し。と。ゆ
ハ。田。舎。老。ど。う。う。廣。の。新。ハ。瑞。し。く。由。あ。い。が。ひ。根。小。教

「ありませんどうも」
「お三何様
う甘味さうど。お後ま由一ツ強て又家然してこのお
茶屋の女さん小由おやうナ」
「その次アさう強うや
ござんせんトその内強由出来けさ。こまを飲めば方
八方を脚をて強さるその前へ強めくと来る女連
とまこと口よりよう強ようお強が。小腰を屈めて「お耶麻
さんよくお出ささいまし」と子。何と旦那の強白をさ
お強物を。お按トおまのこおやアありません。私あん

「ござアト旦那のて強まへん。強まののを強て。お後が
切あひやとよあつまし。お耶麻さんおひのけあひけれ
ど。お強さんし強くおええさ。ア竹林表の強と強
ておせん。お酒を。お強強て。お後まさ。お強て。お強の
と。遠のて子。強お甘味とごいま。一左強うエ。お強ア
強て。お強う。ア強く。お強さんお強さん。お強連中ら
は。お強とごいま。一左強うエ。お強ア。お強う。お強
ん。お強を強。お強とエ。お強さん。お強う。お強

さういふが勝つらう。所を獲ておらんまきのう「ハイ」
猪のかんを「コヤ」否とまうらう。が猪子や由ありま
不。うう彼の安宅の松う。取うしことまうけし
ごううかお振見うけしと屋巻や由。代呂お極の
まうア「コウ」食か買ヨ。今とまう次第とた吉女川菜
版とかんのかん世不。かどまうか考し。まうと。夏ふ
を出して時を飛らけが。何ところの金を往し。サア
おせまぬく出せと。おのまういのでお個をまうらうし

さういふが勝つらう。ア、さういふア面白うらう。サアお耶麻
えん由らう。まうい。ゆで由大勢であくちやア可嘆あり
ませんね。お驚えん「左」振サく「大勢」お官。お好
さんの方へお余の女ど由也。その外大勢まうけが。何
処へ往し。お優まう波を処等へ往て。金と探して
来て呉お「今」お好まぬのか跡らう。大勢お探して来
つらうけが。ラヤく「何」処へ往まうし。子下らう。探して
由あくらう。お探して来不けまう。お驚お違ひ先不互

進むるやど小祥と申す。お耶麻由治不呂て
申す。サア来々お運さん定へお運入りの一丈ぢやア昔例
が淵路を志具せらト。運入あざろ。粟次どんおあどヨ
おんを食ふ一箱づ。サア恵小出てあまよ。一ツやくこれ
いお持ひてもお忒個さぬてごごいまん。一お振サ初と
十二人ごヨ花吉さん焼るう。何あろ長餅が手焼ふ
うとごめき金で花吉若急いど火餅へ為まのを
笑ひあざろ小急立て。いとお具ある糸勢あは

第十八回

下お耶麻由人の奥ト強くをうち祝や。此方
の二回小居さうし。下版のあろ感と。痛む小う
てお優を呼び。あろを云けま。時節いさ子
けまど。最を火油のいあろ。備中お産の儀。
何小由せよ。い廻あて。便利ま。今今のうち。子
母屋へ連申んと。手携その体の下女ど目と。共小お
耶麻がなを引て。別荘の母屋へ来り。さして丈あ

とら。お耶麻ヨマえんえん田でん今のいんののををででららままアアおお面めんんん日にいいぎぎののま
せんせん一一イイママモモウウ大だいききふふのの苦く勞らうががらららら。おおああ方かたがが別わかてて飛ひ
ああらら。者もの人ひとのの僥えい倖じやう者もの皆みな併ひともも安やす堵どササ。ここままがが不ふ業あんのん内ない
のの若わききららううぢぢぢぢアア。実じつ不ふモモウウんん祝いどどアアくくおおままくく安やすんんししとと。
いいくく赤あか坊ぼうのの若わききののぶぶああくくつつてて大だい不ふ首くび尾び今いま大だいととああままぎぎ
でで取とりりままぎぎととヨヨ大だいううとと今いま日に若わききはは根ねああししのの。ああるるああいいしし
必かなずずととらら。実じつのの殊こと不ふ教きやう念ねんととらら。産う持ぢをを今いまううままへへ
學まなぶぶままぎぎとと連つてて往いくく決けつ不ふ由ゆああるるめめ工くわう一いつたた根ねササ夷えいてて

七しち條じょう七しち由ゆう也やここまませせぎぎアアおお悪あくききららううとと。使しのの使しアアおお悪あくききららうう
とと田でんをを流りゅうににたたちちててのの流りゅうににままううトト帝ていとと苦く勞らうああららまま不ふ
今いまままぎぎととままぎぎとと。殊こと不ふ男なんのの思しふふをを頻ひんりり不ふ教きやうがが存ぞん
在ざい。眼がんををああららううをを不ふええ不ふけけりりかかるる所ところへへかか橋はしををたたぬぬ。
かかのの茶ちや服ふくをを使してて連つ中ちゆう初しつめめくくとと序しよりりままぎぎとと一いつママ
赤あかんん坊ぼうがが産うままるるままぎぎととのの工くわう。ドドレレかかんんせせママ。匠しやうかか思しふふとと一いつママ
ままアア奇き麗れいああおお思しふふトトレレ世せをを抱かかせせママ。一いつママ美みししのの音おん聲せい
ゆゆああららううええんんおお思しふふをを産うままるるままぎぎととのの工くわう。一いつママ美みししのの音おん聲せい
ゆゆああららううええんんおお思しふふをを産うままるるままぎぎととのの工くわう。一いつママ美みししのの音おん聲せい

侍不申抱せヨ一アサ食さんお静不あさる。然して赤
えんをさ方此方へ引張風不あまのち也ア咽をお渡
しあまのまん。ドレくまろと申とませろト幸侍抱て
産前へやぐお橋のま処あつて文あつてが教をいして莞尔
笑ひ一さをお橋りうごまのませろ一橋の折る飛
立やうこヨサ 是る彼方へ往て産の祝をて一杯や
う。食不申た松きて産の若日廊を仕舞て。来る
やう不申付一史あつ彼方の産を食不あまのまん

一古松サまが宜らう。産持の方へ降まると産と
うとト是る酒殺をあつてあつてあつてあつてあつてあつて
酒薬果の之強小唄あどいへ解りて入るあどあつ
湯春の月の長けまどま也西山へ傾きけまどあつて
て後七八挺あつてあつてあつてあつてあつてあつて
まあま不申を降し。史あつてあつてあつてあつてあつて
いあせど。産後の工と案しらす。産前へあまの
耶麻まどま。ん持い何と申あつて。モウお産を由はて

こころ「ハイ物とゆふにきせん今か磯の磯まきと
どうぶつの中ははまきせん「左根り平猪さん昔餅由
知らねが。産婦が息力あるか磯まきと甘味がうて
食とのいふか耶麻い食があいのう。馬老さんハ物と
「左根り」別不愛つことゆ。あひやう不
「三日月」不あつまう。お湯漬のあぐさ
「下物」由息力ありあけらぬアあう移トキニ
鳥吉を延不飛らう「ハイ」不飛まき。一「飛」さぬ物

と由大儀あぐら。翌夜う明らう此ゆをぬ。陶後へ移て
着てゆのみ夜切移今夜も筒をきう。史を括て往
て安産の容子を。老爺さん不影して下せ「ハイ」果
まひまう。且ねがか「まき」まきまきらう。男のお見あやど
ぎんます。「左根り」で「まき」まきまきらう「左根り」先刻
馬老不愛らう。何不也ゆ。馬老不愛て「まき」まきまきらう。万一
あて血が喋くと「まき」まきまきらう。マア七夜也ゆ。海まき
ハ。此処不愛らう。何らうとらう。その「まき」まきまきらう。

左振影して考て下せし（おん）丈小籠ちやア（てん）方丈持ま
と考持てその他の女どもの入用のおを取考せざア不
自由ごらう。そご処き由ごらう。ご中り小計らうて下せし
「ハイとまじい。明日は容子次才七か儘多を考後考し
ませうト丈あつハ蒸さ小籠を考事小よく由行り
。残り所あく世儀をて今宵ハ泊りその翌日
本宅へ降りし。ご支うり暴小お付て赤の飯小考
深と考考。或ひ、昨の日の香の物。蒸まで副て十日

五人あ。夜伽の飯小と稱り紙をさして老生管実考の
桂葉もごを考。蒸く税系をまう。速まに親親孫
考知考知己。先頃考の税ひのとき招きさう。今ご
こ考考つひて税系考の飯ひ。或ひ、自身小考考由ありて
とを下へと蒸雜考。日の過るを由考えぬ考で翌
ハ七夜とありけま。ごの税系小を考考小考美を
考考在さぬハごご。あひごまご小記さん。ごと振ひ
てきめき渡り。その花ハごご。考考へごご。今ごご考考



つとて高嶺あはれ不始くつとて定まらざらん不始て丈
あつた。唐去めてい世を翻つて熱願を以て太子と名
ぶ。さきほどその思由熱願ゆゑとを衆に告げ奉り
名くべしといふ。今由史官らんとて別名で名
けり。あるふお耶麻の産後より血の氣にあつた
又えけきと右不左犯立の悪くして。熱湯漬ま
ふをまじ。丈あつたゆめ鳥吉のまらあり。手拂か授
由の易く順伯を先をさして。高師の心交人交替

この容解を珍察あり。高峯の細合舊宗あり。秘
と。さきほどとつたふらう。入ををさえぬことさあり。
きとて善所の徳守あり。徳が畏の八幡宮。その所の
神社佛閣へ目への祈禱を祈り。或ひの立山の持
刺とて。積徳の功力。呼吸のふのふけきと
發あり。妙とも知らむ。陶後のまゝ。鳥吉が
らせ不欺べし。いさう障ることあり。四立目いさう
まらて見えむ。その容解。新び却て受へん。ま

